

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520355

研究課題名（和文）

ドイツにおける大衆の文学・芸術の発展—ベルリンの大衆と芸術

研究課題名（英文）

Development of the popular arts and literature in Germany - the masses and the arts in Berlin

研究代表者

宇佐美 幸彦 (USAMI YUKIHIKO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：00067737

研究成果の概要（和文）：

ベルリンの大衆と芸術について、その具体的な例として、ハインリッヒ・ツィレおよびビルダーボーゲンという大衆的芸術活動の特徴をまとめた。ツィレが生涯一貫して風刺画のテーマとして描き続けたのは、彼が「第5階級」と呼ぶ社会の底辺で生きる人々の姿である。ビルダーボーゲンに関しては、グスタフ・キューン社の出版物を中心にその特徴の推移を検討した。この絵物語が20世紀に発展する漫画の先史となっていることは、大衆的芸術研究にとっては重要である。

研究成果の概要（英文）：

On the masses and the arts in Berlin, the characters of the popular art activities were researched especially in the cases of Heinrich Zille and the "Bilderbogen". What Zille continued to draw as his themes of the caricature all his life were the lowest-class people, called "the fifth class" by him. About the Bilderbogen, the changing process was considered mainly on the publications of Gustav Kühn Company. It is very important for the studies of the popular arts that this Bilderbogen was one of the forerunners of the "Manga" (Comics) culture which developed in the 20th century.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：大衆芸術、ドイツ文化、ハインリッヒ・ツィレ、ビルダーボーゲン、一枚絵

1. 研究開始当初の背景

ドイツにおいて過去に大衆的な人気を誇っ

た民衆的文学・芸術という分野におけるハインリッヒ・ツィレとビルダーボーゲンについ

ては、日本においてはこれまでほとんど研究されてこなかった。ベルリンの民衆と深いかわりを持つこれらの大衆的芸術作品についての本格的な研究は日本では未着手同然の状態であったといえる。ツィレとその作品に関して、日本でこれまでに公表された文献としては、石子順の著作『カリカチュアの近代／7人のヨーロッパ風刺画家』（柏書房1993年）に他の風刺画家と並んで1章が述べられているだけである。しかもこの文献は啓蒙的な紹介の図書であり、本格的な研究としては十分であるということではできなかった。またビルダーボーゲンについての本格的な研究も日本ではまだほとんど行われてはいなかった。ほるぷ社発行の図版『復刻・ミュンヘン一枚絵』（1983年）は、この分野における日本での最初の出版物ではあるが、これはビルダーボーゲン作品（図版）の復刻であり、別冊のパンフレットの解説書によって、作品の解説は加えられてはいるが、そこでは図版に掲載された原文の翻訳と入門的な解説があるのみで、本格的な研究とはいえないものであった。しかも作品の点数は全部で25点のみであり、ノイルピーンの発行所で印刷された作品だけでも2万点を超えるこの大衆的な印刷物の生産活動全体からすれば、きわめてわずかな部分をほとんど系統性もなく散発的に集めたものにすぎなかった。また野村法『目で見えるグリム童話』（1996年、ちくま文庫）にもビルダーボーゲンの作品が16点取り上げられ、これに解説が加えられているが、文庫本という性格もあり、内容は紹介的・入門的なもので、やはり本格的な研究という文献ではなかった。またここで取り上げられているビルダーボーゲンには、ノイルピーンの発行所での制作の作品はなく、ミュンヘンとシュトゥットガルトの発行所で制作された作品のみであり、しかもグリムのメルヘンを扱ったものに限られており、ビルダーボーゲンの全体像からすれば、ほんの一部を紹介したものにすぎなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、（1）これまで日本ではほとんど知られていないドイツの大衆的な文学・芸術の具体的な内容を検討し、芸術活動の底辺的な広がりや歴史的な事実として考察すること、（2）大衆芸術のジャンル間の相互関連について理論的な考察を深めること、（3）一流芸術と大衆芸術の関連について考察を行うこと、であった。

3. 研究の方法

歴史的な資料に即して実証的な研究方法を実行した。これまで本研究の対象となる作品

については、日本では十分な資料を手に入れることができなかったのであるが、ベルリンの国立図書館、ノイルピーンの市立博物館、ツィレ博物館（ベルリン）などを調査し、多くの資料を収集した。また民謡との関連を調査するために、フライブルクの「ドイツ民謡資料館」を調査し、作曲や歌詞に関する多くの資料を収集することができた。その成果として19世紀の大衆的な芸術作品としてのビルダーボーゲンと、20世紀初期の大衆的芸術家ハインリッヒ・ツィレの作品を分析し、大衆と芸術との関連について、詳しく考察することが可能となった。

4. 研究成果

（1）ハインリッヒ・ツィレが生涯一貫して風刺画のテーマとして描き続けたのは、彼が「第5階級」と呼ぶ社会の底辺で生きる人々の姿である。ツィレの作品世界は20世紀初頭のベルリンにおける「ツィレ・ブーム」により広く大衆に知られ、ツィレは国民的画家の地位を獲得するが、この時に世間によって付与されたイメージはその後、現代まで受け継がれ、一部は、ベルリンの観光産業と結びついていわゆる「街おこし」的な役割さえ担っている。今回の研究ではその画家の内包する多面性にも焦点を当て、実際の人物像の解明を試みた。ツィレとその作品に関しては、日本では石子順『カリカチュアの近代／7人のヨーロッパ風刺画家』除いては、ほとんど研究も紹介もされていないのが現状である。この意味で本研究は、日本で風刺画家ハインリッヒ・ツィレに関する極めて貴重な情報、資料となることと思われる。

（2）ビルダーボーゲンに関しては、グスタフ・キューン社の出版物を中心にその特徴の推移を検討した。19世紀中頃までの同社の作品は、ビーダーマイアー的な世界観に支えられ、家庭の幸福、市民としてのモラル教育的に示すという内容のものが多数であった。しかし同社の19世紀末から20世紀初頭の作品では、そうした教育的配慮はほとんど見られなくなる。人の失敗を嘲笑したり、純真とされてきたはずの子供がとんでもないいたずらをしたりするという、社会のモラルに違反する内容の作品が主流を占めるようになる。この背景には、産業革命以来の競争原理を強調する社会風潮があると思われる。しかし芸術の発展としてはリアリティが増し、初期の現状肯定的な幻想がなくなったという意味では、一定の発展があったとも考えることができよう。いずれにしてもこうした絵物語が、とりわけいたずら者の子供という設定が、20世紀

に発展する漫画の先史となっていることは、大衆的芸術研究にとっては重要である。実際に20世紀初頭のアメリカにおける、「イエローキッズ」などの初期のコミックスは、ドイツのビルダーボーゲンの影響をきわめて強く受けていることが判明する。

(3) 当初予定していたように、ハインリッヒ・ツィレとキューン社のビルダーボーゲンについて、ほぼその全体像に近いものを明らかにすることができた。この二つの対象は、これまで日本ではほとんど研究されたことはなく、資料を整理することだけでも今後の研究の基礎を築くことができたといえよう。今回の研究は内容的にもそれぞれの特徴を多角的に明らかに、歴史的な位置づけをするという点まで成果があった。

(4) 大衆芸術のジャンル間の相互関連についての理論的考察は、ツィレの場合は、図版に添付されているテキストと図版との関連性、ビルダーボーゲンにおいては、文学的テキストと図版、テキストが作曲されている場合はそのメロディーを含めて検討された。時間的な制約のため十分に解明されえなかった部分もあるが、少なくともノイルピーン・ビルダーボーゲンに関しては、多くの歌謡メロディーが図版化されていること、そして大衆的なビルダーボーゲンでは図版が、普遍的な理念を問題としている文学テキストをビーダーマイア的に平凡化していることが判明した。つまりゲーテやハイネなどのドイツ古典主義やロマン主義の本質である、普遍的な理想に対する追求は日常的・小市民的現実の現状肯定的な表現へと作りかえられているという点が本質的な問題点として指摘されなければならないであろう。またグリムのメルヘンのもっている口承芸術の生き生きとした生命力（多くの場合、原始ゲルマン的・反キリスト教的な自然肯定）が、ビルダーボーゲンにおいては19世紀的のキリスト教的モラルの立場から変更を加えられている作品も見出すことができた。こうした事例から、本格的芸術路線と大衆的・通俗的芸術路線の基本的な境界が指摘されなければならないであろう。しかし現代ヨーロッパの社会的モラルも歴史的に見れば大きく変化してきているのであり、この境界線は決して固定的なものでないこともまた確認されねばならない。キューン社の19世紀後期のビルダーボーゲンには、現状を告発する作品や、社会的矛盾を滑稽化する作品も数多く出現した。テオドール・フォンターネなど19世紀の作家たちは、少年時代にこのビルダーボーゲンという大衆的芸術作品に親しみ、芸術的成長を果たした。そしてフォンターネや同時代の多くの作家たちはこの大衆的な芸術を高く評価している。通俗的芸術が、19世紀

リアリズムの作家たちの芸術観を育てたことも事実であり、この意味で大衆的芸術が一流芸術に影響を与えたという点も確認される。その影響においてもっとも重要と思われる点は、芸術家がこれまでの芸術カノンの地平を乗り越えようとするとき、民衆の趣味や志向、社会の底辺的な現実、生命力あふれる大衆の息吹などに注目し、新たな活力を得て、芸術の可能性を拡大した点にあると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

- ① 宇佐美幸彦、キューン社の後期の文学的テキスト付きビルダーボーゲン、関西大学『独逸文学』、査読無、第56号、2012、49～97
- ② 佐藤裕子、ハインリッヒ・ツィレの少年時代と「ミリョー」、関西大学『独逸文学』、査読無、第56号、2012、1～27
- ③ 宇佐美幸彦、ビルダーボーゲンに見る家庭観、関西大学『人権問題研究室紀要』、査読無、第63号、2012、63～98
- ④ 宇佐美幸彦、エーミケ・ウント・リームシュナイダー社の初期ビルダーボーゲンにおける文学的テキスト付作品、関西大学『文学論集』、査読無、第61巻第3号、2011、49～83
- ⑤ 宇佐美幸彦、シリングとの「文筆戦争」、『ハイネ逍遥』、査読無、第6号、2011、13～23
- ⑥ 宇佐美幸彦、19世紀中葉におけるグスタフ・キューン社発行の文学的テキスト付きビルダーボーゲンについて、関西大学『独逸文学』、査読無、第55号、2011、1～34
- ⑦ 佐藤裕子、ハインリッヒ・ツィレの『通りの子供たち』一部屋の中の『死』に託された警告、関西大学『独逸文学』、査読無、第55号、2011、35～53
- ⑧ 宇佐美幸彦、ハイネのベルリン生活、『ハ

イネ逍遥』、査読無、第3号、2010、1～9

⑨ 宇佐美幸彦、グスタフ・キューンの文学的テキスト付き初期ビルダーボーゲン、関西大学『独逸文学』、査読無、第54号、2010年、9～33

⑩ 佐藤裕子、ハインリッヒ・ツィレ『マイン・ミリョー』に於ける風刺・ユーモア・Witz、関西大学『独逸文学』、査読無、第54号 2010年、57～72

〔学会発表〕(計1件)

① 宇佐美幸彦、文学作品の視覚化——19世紀ビルダーボーゲンに見る文学作品——関西大学独逸文学会第104回研究発表会、2011年11月12日、関西大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇佐美 幸彦 (USAMI YUKIHIKO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：00067737

(2) 研究分担者

佐藤 裕子 (SATO HIROKO)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：30278600

(3) 連携研究者

()

研究者番号：